



豪勢な

ワンピース



greentea0117

豪勢なワンピース

子供が小さい頃、服は全部手作りしていた。子供服は、すぐ小さくなるのに高い。三人の子供がいてやりくりが大変だったので、手作りを思いついたのだった。子供たちはみんな、手作りを喜んだ。けれどやはりお下がりには嫌なようだ。けれども私の腕も上がり、スカートをTシャツに、Tシャツを短パンに作り替えるくらいの技術は身につけていた。こうして三人の子供たちは、高校を卒業して家を出て行くまで、私の手作りの服を着ていた。今思えば不思議なのだけど、思春期になっても子供たちは私が作った服を嫌がることはなかった。むしろ結構喜んでいた。

「だって母さん、みんながお小遣いを服に使っているときに私は他の好きなものを買えるんだよ。ラッキーじゃん」

そう言った娘は今、大学生活を送っているが、時々送られてくるスマホの写真を見ると、やはり服には無頓着な様子だ。せっかくのキャンパスライフなのだから少しくらい着飾って、ボーイフレンドの一人や二人、一緒に写真も見てみたいと思うが、そうなったらなったらまた心配してしまうのだろう。

息子二人は服に、異様なまでの執着を見せ、一人は服飾の学校へ、もう一人はデザインの学校へ進学した。意気揚々と服を作る姿や、あらゆるものをデザインしようとする熱い心意気を見るのは、うれしいような不思議なような気持ちだ。とにかく子供たちは巣立ち、私のミシンは役目を終えた。

かのように思えたけれど、しばらく自由な時間を満喫した後、私は気づけばミシンの前に座っていた。けれどももう、何も作るものを思いつかない。子供たちがいた時、このミシンは休む間もなかったのに。取り残されたような気持ちになって、なんとなくがたがたとミシンを踏んだ。気づけば、娘に最後に作ったワンピースが出来上がっていた。そのワンピースで娘は花火大会に行ったのだった。女友達と行くと言っていたけれど、男の子だったのは分かっている。今思えば、娘も私が分かっていたことを知っていたのではないだろうか。

私はそのワンピースを着て、町へ出かけた。コーヒーを飲んでいると、ぽろぽろと涙がこぼれた。私は涙をふき、綿のワンピースが皺にならないよう座りなおした。それから手芸店に入った。自分のためのワンピースを作る、上等の布を探さなくてはならない。

「思い切り高いのにしよう。パーティーにでも着て行けるような、豪勢なのを作ろう」

そう思ったら、ふと娘のウェディングドレスの姿がまぶたに浮かんだ。私は年甲斐もなく、布地を手にしたまま声を上げて泣いた。